宗像
毎月十五日発行
発行所
宗像大社
宗像会
〒811-3505　福岡県宗像郡玄海町
電話　0940－62－1311㈹
定価　一年送料共　1000円

沖津宮現地大祭斎行

＝紺碧の海進む参拝船団＝

毎年、五月二十七日に玄界灘に浮かぶ神島「沖ノ島」で、沖津宮現地大祭が斎行される。沖ノ島は、九州本土より北方約六十キロ先にある周囲四キロ程の小島で、当大社御祭神、田心姫神を主祭神としてお祀りする「宗像大社沖津宮」が鎮座し、同宮をお護りする神職一名が交代で常駐奉仕している聖域の島である。今日でも女人禁制であり、一木一草たりとも島外に持ち出しを禁ずる等、古来からの掟に守られた「神ノ島」として広く知られている。この「沖津宮現地大祭」は、今を去る明治三十八年五月二十七日この沖ノ島近海洋上に於て、日露戦争の天王山とも云われた日本海海戦の激戦が繰り広げられたことに始まる。

当時世界最強と云われた帝国ロシアの誇るバルチック艦隊司令長官ロジエントウェンスキー率いる大艦隊を東郷元帥率いる日本連合艦隊が「皇国の興廃」をかけた此の海戦で破り全世界の注目を集めた。この海戦を記念して五月二十七日は「海軍記念日」として永く人々の記憶に留められた。しかし、この記念日も第二時世界大戦の敗戦により廃止された。当大社では、沖ノ島に縁深きこの記念日を卜し沖津宮の神前に於て「現地大祭」を斎行している。この祭典には一年に一度だけ多くの人々（男子のみ）が参拝でき、毎年氏子、崇敬者が全国各地から参拝され、平素は神職一人の此の神島もこの日ばかりは、多くの参拝者で賑う。

今年の「現地大祭」には、当大社の参拝許可を受けた全国各地から信仰篤い約百七十名の人々が参集された。大祭前の二十六日筑前大島の中津宮に於て受付をすませ、沖ノ島渡島安全祈願の宵宮祭に参列した。中津宮の境内は、多くの参拝者で埋め尽され太田宮司に併せて玉串拝礼を行い、全員渡島の航海安全を祈った。祭典終了後、海洋分局長升谷祢宜より渡島の意義について説明があり、続いて各班別に担当神職より入念に諸注意と説明が行われた。

翌二十七日午前六時、参拝者全員が大島港に集合、各船毎に担当神職による乗船名簿の確認が行われた。先ず海上保安庁灯台見廻船「げんうん」が出港、続いて同巡視艇「こちかぜ」大島渡船「しおかぜ」さらに大島漁協所属の奉仕船団三隻が沖ノ島に向け次々と出港した。当日は、快晴にして波静かな絶好の参拝日和に恵まれ、各船は真っ青な玄界灘に一筋の白い航跡を描きながら一路沖ノ島へと向かった、沖合いは霞がかかり暫くは大海原をひたすら航行していたが、やがて「沖ノ島」の島影がぼんやりと波間に浮かぶと船内より歓声が上がった。島影が次第に大きくなるにしたがい参拝者一同期待に胸をふくらませ、着島はまだか、と待ち構える中午前八時三十分全船無事沖ノ島港に入港した。全員ただちに海水禊の為海中に入る。此の禊は沖ノ島入島の際に定められた掟の一つである。神職と同様に禊を済ませた参拝者一同は四百段に及ぶ石段参道を登り、原生林の中巨岩に守られるように鎮座される沖津宮本殿前に参集した。

午前九時三十分、小鳥の声と五月風に揺れる若葉の葉音だけが聞こえるしづかな原生林の中に本殿の太鼓が鳴り響き「沖津宮現地大祭」が太田宮司以下神職五名の奉仕のもと厳粛に斎行された。神前には多くの神饌、（献魚、献酒、御神水）が御供えされ、太田宮司の日本海海戦で国運を担い命を賭して国を守った先人達の功績を称え、更なる国家皇室の安泰と国民の平穏を祈る祝詞が奏上された。宮司の玉串拝礼に続き、佐藤沖中両宮奉賛会長、出光興産（株）小沢信裕氏を始め各団体代表に合せ敬虔な祈りが捧げられ、滞りなく祭典を終了した。祭典終了後、太田宮司が当大社の由緒と日本海海戦を此の沖ノ島で眼下に見た佐藤市五郎翁（当時十七才、佐藤奉賛会会長の父君）の話や、東郷元帥、秋山雅之参謀等を始めとする人々の篤き信仰を披露すると共に、参拝者一同にお礼を申し上げた。

祭典終了後神前に更なる祈りを捧げる人、古代祭祀遺跡を見学し当社松本学芸員から説明を受ける人、さらには山頂に登り灯台から視界を望む人、無事参拝を喜び下山される人、それぞれが沖ノ島の神聖に魅了され敬神の念を新たにされた様であった。島の波止場では、沖中両宮奉賛会、同翼賛会の方々のご奉仕による新鮮な海の幸が用意され、参拝者一同感謝の心いっぱいに美味しく頂ながら参拝できた喜びをかみしめ合い、神人和楽の直会を楽しんだ。

午後零時三十分、全船は沖ノ島港を出港し、帰路につき、午後二時三十分全船無事大島港に入港した。波止場には参拝者の家族や、関係者の人々の出迎えを受け参拝者等と共々に参拝の喜びを語り合い感激を新たにしていた。連絡船で家路につく人、再度中津宮に参拝される人、宿に帰られる人等夫々に解散し、ここに本年度の「宗像大社沖津宮現地大祭」は無事盛大裡に終了した。

神具・装束
結婚式場用品
株式会社　井筒
福岡店　福岡市博多区東公園二一－三一（〒812－0045）
電話　福岡（〇九二）六五一－九四五六番
本店　京都市下京区油小路六条北入（〒600－8231）
電話　京都（〇七五）三四一－三三四一㈹～四番
三四三－三三四一番

余滴

「日本におけるフランス年」の開始を祝って、シラク仏大統領が四月二十九日、来日された。日本訪問四四回と云う同大統領は、日本の陶芸、建築、演劇、料理、相撲、と幅広い日本通として知られている人でもある。シラク大統領が当日の記者会見で、日本経済についての質問に大変興味深い説明をされた。「危機」と云う言葉の意味を通して、今の日本経済に対して『危機と云う言葉は二つの漢字から出来ている、危険の危と機会の機から出来ている言葉である。

このような語意から一つの言葉を作ると云うことは、東洋人の知恵である。危険は管理していかなければならない、がこれはまたチヤンスでもある。物事を悲観的にしか見ない人もあるが、これを機会としてとらえ将来について考えるとき、これをいつも念頭におく必要があります。そこに東洋の知恵があります』と説明された。

日本人が忘れている東洋の知恵を同大統領から教えられた気持ちである。危機は絶えず動いている、その危機に的確に判断を下し好機として行く知恵を東洋人、特に日本人は持っている。日本国の永い歴史を紐とけば、その知恵で危機を乗り越えて来た。その知恵の生まれる源に神道があり、熱祷を捧げ、危機解決への懸命な努力によって神の御加護が得られた例は多い。今の日本人は経済力に振り回され、本来の知恵を忘れているような気がしてならない。

第四四四回

宗像大社歌会詠草

大野展男選

毎月25日〆切（厳守）

福間　池浦千鶴子
葉桜は葉桜でよしと境内をまはれば残りの花の散りくる

（評）葉桜もまた良しとして眺める作者に残りの花が散りかかってくる静謐なひととき、自然を自然として受け入れる態度こそ歌を生む必要不可欠のものである。平明でいい歌。

日の里　石松　弘次
四人の子独り立ちしぬ妻ときて公民館に万葉を学ぶ

（評）生涯学習に励むお二人、万葉集を学ぶことは大変なことであるが、時間はたっぷりとある。それを楽しい時間として過ごされることを私は祈る。

田久　井上　光
渋滞の車はなれて風にのる赤風船よ夏空青し

（評）すがすがしい一首である。渋滞のいらいらした気持ちを一瞬忘れたことであろう。作者の目には赤い風船の飛んで行った五月の空のかがやきが見える。見えることは見ること、見ることはいい歌の生まれる根源でもある。

名古屋　小田　留子
政治汚職の記事ばかりなる朝刊をベンチに置きて尻に敷きたり

（評）「尻に敷きたり」にこめられた庶民の怒りと嘆き、痛烈なる政治不信の歌である。

原町　八波　五月
金色にかがやく麦をまなかひに幼友住む鞍手山見ゆ

福間　中村　勇
一つのみ咲きし大輪の椿なり落ちしを枝に戻してまた見る

吉留　高山　信子
雨模様吾娘の家にて障子貼る老いたる吾の生き生きとして

庄内　原田　衛
若き日の教え子二人はるばると見舞に来たり嬉しき限り

土穴　瀧口　敦子
筑後川に延々続く菜の花は黄に埋まりて水に煌めく

朝野　藤井　浩子
隣家のゼラニューム数本わが車庫に項垂れ咲きて小雨に濡るる

田野　森　つるの
夕焼の空に一筋飛行機雲金に染まりて西へ延びゆく

日の里　石松　知子
肩を組み戯れてゆく少年の変声期のこえ風に乗りくる

大島　越智　治子
降る雨の音のはげしき道の上燕が低く餌もちて飛ぶ

自由ケ丘　細川　絹子
金銀の折り鶴テレビの上にあり孫去りてより過ぎし一年

日の里　大和美由紀
満開の枝垂れ桜の続く道われら五組の夫婦歩めり

光岡　森田富佐子
白鷺の姿見えずと云いおれば補聴器持つごと一羽寄りくる

光岡　古森テル子
白鷺のかそけき姿何処へととびゆくならん雨のふる中

在自　佐々木和彦
三株ほどアスパラガスの苗を植ゑけぶれるやうな葉を見守りぬ

曲　天野　玲子
十年間娘が住みて去りし町通れば胸に迫るものあり

武丸　中村さつき
こんもりと丘のつつじは整枝され咲き満つ花に小雨又ふる

田野　森　甲子
初（うひ）孫の誕生なるか高々と黄金の鯉のぼり朝空泳ぐ

名古屋　小田　喜一
田植え機のエンジン響きあしたより水田はみどりに変りてゆけり

光岡　河村　久光
朝目覚めカーテンひらけばカンランの黄色き花咲くそよ風受けて

池田　小田　イセ
一点の雲なき空に光を返す自衛電波の白き鉄塔

徳重　石松ヤス子
此の春は木の実を食ぶる鳥は来ず万両の実のたわわに残る

町上津役西　有吉　陽子
玄海は逆白波のおしよせて夜来の雨もまだ降りしきる

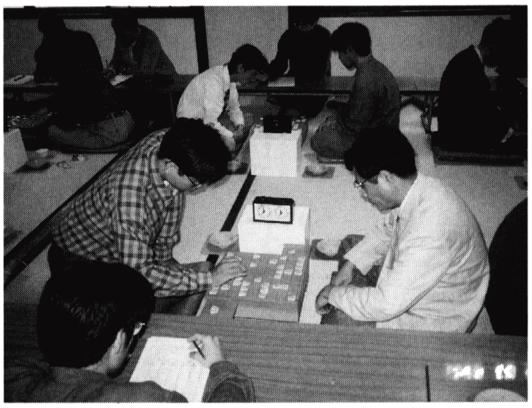
鐘崎　安永　久子
釣川にしがらみすべて流せしや従姉のふくよかに笑みし写し絵

ひかりケ丘　藤原みさを
迷いたるとき姑に問ふことわがわれに約束なして遠くなりたり

東京　荒川　桂朱
落葉敷くきざはし上がる高宮はしじまの中に清々しけり

第二十一回 宗像王位戦

二十一代王位に藤本壮太郎四段（福岡）



境内の樹木の新緑の香り漂う最中の去る、五月十七日（日）午前八時より西日本アマチュア将棋界の最高峰である「宗像王位」の座を競う、第二十一回宗像王位戦（主催宗像大社・西日本新聞社、主管日本将棋連盟福岡支部、後援日本将棋連盟・宗像市町村長会・テレビ西日本）が、日本将棋連盟より、滝征一郎七段を審判長としてお迎えし、宗像大社斎館に於て開催された。出場選手は九州・沖縄・山口九県（福岡県は福岡都市圏二名、北九州市二名、筑豊京築・筑後地区各一名計六名）の・各県で予選を勝ち抜いてきた代表二名づつと、前年度王位の二十三名で、最年少の藤井四段（山口県）を始め高校・大学生、社会人等多士済々な顔ぶれに、初出場の六名で、かつての王位、準王位、三位、四回以上（五名）出場のベテラン勢に二連覇をかける伊ヶ崎五段（長崎県）により白熱の対局が競われた。対局はA・B二パートに別れて持ち時間三十五分、以後秒読みトーナメント方式で、滝審判長の合図で白熱した対局が繰り広げられた。王位の栄冠を獲得した藤本五段（二回目）は第一回目不戦勝でのあと、第二回戦目は、沖縄県代表の権藤六段（四回目）と、第三回戦目には二連覇をかける伊ヶ崎五段と対戦、悪戦苦闘もつれながらも得意の穴熊に持ち込んで、気を取り直してからの攻めがさえ勝ち進んだ。決勝戦では、またもう一人の沖縄県代表の気鋭の若手大城五段（三回目）と対戦ここでも少々もつれながらも攻め勝った。「優勝を狙っていた、勝ったので非常にうれしい」と会心の笑みを見せていた。清明殿に於いて、滝審判長による決勝戦の大盤解説が行われた。

各県代表の選手名並びに戦績は左記の通りである。

◇各県代表選手名◇

第二十代王位（長崎県）		
伊ヶ崎　博	（27）	五段③
福岡県都市圏地区		
秋山　運朝	（24）	五段②
福山　英明	（41）	五段⑨
福岡県北九州市地区		
浅田　達彦	（54）	五段②
藤本壮太郎	（26）	五段②
福岡県筑後地区		
高田　伸二	（44）	五段③
福岡県築豊京築地区		
若山　征洋	（55）	五段②
長崎県		
鮎川　哲朗	（46）	四段⑤
浜口　博之	（29）	四段④
佐賀県		
末次　淳一	（24）	四段初
星出　明	（24）	四段③
熊本県		
田村　博	（63）	五段初
石原　久雄	（39）	五段②
鹿児島県		
四本　正志	（35）	五段初
原口　貞美	（46）	五段⑥
宮崎県		
山川　定一	（62）	五段初
大迫　健	（43）	五段④
大分県		
葉口　修治	（24）	四段初
竹永　国弘	（33）	四段②
沖縄県		
権藤　敏夫	（39）	五段④
大城　克友	（20）	五段③
山口県		
藤井　佳久	（18）	四段初
重本由紀夫	（45）	五段⑥

以上二十三名

◇対局成績◇

※Aパート

▽一回戦

大迫五段――福山五段

権藤五段――石原五段

星出四段――重本五段

高田五段――原口五段

▽二回戦

伊ヶ崎五段―大迫五段

藤本五段――権藤五段

星出四段――竹永四段

高田五段――鮎川四段

▽三回戦

藤本五段―伊ヶ崎五段

星出四段――高田五段

▽準決勝

藤本五段――星出四段

※Bパート

▽一回戦

四本五段――秋山五段

藤井四段――末次四段

大城五段――浅田五段

若山五段――浜口四段

▽二回戦

山川五段――四本五段

藤井四段――末次四段

大城五段――田村五段

葉口四段――若山五段

▽三回戦

藤井四段――山川五段

大城五段――葉口四段

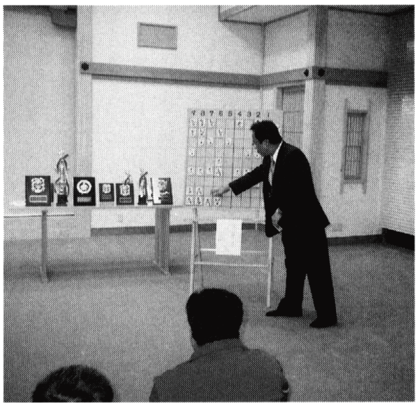
▽準決勝戦

大城五段――藤井四段

☆王位決定戦

藤本五段――大城五段

注…上段は勝者、三位決定戦はなし（準決勝戦の敗者二名が三位）



神道における「個人の自由」

総務庁が高校生を主対象として行ったアンケート調査によると、覚醒剤などの薬物使用について、九割以上がその所持や使用が法律で禁止されてゐる事や、その薬害について知ってゐるものの、絶対に使用すべきではないと答へた者は約六割にとどまり、約二割の高校生が使用は「個人の自由」と答へ、二パーセントは種類によっては一度くらゐなら良いと答へたといふ。斯界人の中から、覚醒剤の不法所持による逮捕者が出るといふおぞましい昨今の報道からすれば、改めて驚く数字ではないのかも知れぬ。「援助交際」の是非についてのアンケートであっても、おそらく大差のない数字が示されるのではなかろうか。「他の人に何も迷惑をかけてゐないのだから、自分がどう楽しまうと自分の自由でしょ」といふ彼ら、彼女らの言い分は、テレビや雑誌でしばしば耳にするところである。

高校生などの若い世代だけが、かうした考え方に染まってゐるといふのではあるまい。贈収賄容疑でニュースに登場する社会的地位のある方々にしても、基礎的な感覚は五十歩百歩ではなかろうか。今日の日本人の大多数が、「個人の自由」に汚染されてゐるのである。

○

この「個人の自由」、ことに行き過ぎた自由の問題については、ここで今更に言挙げずとも、戦後民主主義の不十分な現実として、これまでも繰り返して指摘されてきたところである。しかし、神道教学といふ立場で、この問題が論議され、より深い理解を追及しようといふ動きは、私の見る限り少なかったのではあるまいか。個人主義であるとか、個人の権利、人権といふものを、神道ではいかに理解すべきかといふことが、いかほど文章化され、活字になって発表されてゐるであろうか。

戦後の日本では、（戦後といふよりむしろ近代以降といふべきだろうが）個人主義や人権といふものは、近代的民主的な政治理念の基本として一般に理解されてゐるやうに思はれる。一方で、政教分離といふ理念の導入にともなひ、政治は非宗教化、世俗化されてゐるため、むしろ宗教性から隔絶された、合理主義的なものとの感覚が強いやように思はれる。しかし、個人とは何なのかを問ふには、生命や霊魂との関連なしにはすまされない。宗教的背景を無視して、個人主義の理解はありえないと言ふべきだろう。

○

最近、初宮参りの御家族の前でこんな話を申し上げることがある。「赤ちゃんのいのちは、両親はもとよりお祖父ちゃん、お祖母ちゃん、そして数へ切れない大勢の御先祖様からのいのちをいただき、産土の神様のおはからひによって誕生されました。この新しいいのちは、成長されて様々なお働き、計り知れぬ営みをなさる可能性をもってをられます。さらに申せば、子、孫といのちは引き継がれて、数百年の未来には何千人、何万人の祖先となる可能性ももっておられるのです。そう考へますと、このお子さんのいのちはお子さん御自身だけのものでなく、何万人分ものいのちを併せもってゐるものだとも申せます。こうした大切ないのちでございますので、御両親はじめ御家族みなみなさまでお育みなされ、産土さまの御加護もいただき、無事に御成人下されますことを御祈念いたします」といふやうな内容である。

稚拙な社頭講話案をお見せして恐縮だが、この話の基礎にある私なりの考へ方は、個人のいのち、あるいは魂といふものは、個人のものであって個人だけのものではないといふことである。今日の、世上の個人主義者が個人の尊厳を主張するときに、その背景にある霊魂観は、霊魂の不滅、不変の観念ではなかろうか。肉体の形状や能力は人間には個人差があり、千差万別ではあるが、人間の尊厳の根源たる魂はすべての人間が瑕疵なく永遠不滅の天賦のものとして与へられて個人として所有してゐるが故に、人間は平等であり、自由であるとの理解がなされてゐるのではなかろうか。そうだとしたら、さて、この霊魂観の基礎にあるのは、一神教的、創造主絶対帰依的な宗教観のもとでの霊魂観なのではなかろうかと、私は危惧を抱くのである。少なくとも、西欧でキリスト教文化のなかで成立した霊魂観の影響を強く受けてゐることに間違ひはあるまい。一神教のもとで成立した思想が、創造主への絶対帰依といふ枠組のないところで採用されれば、暴走してしまふのは当然の結果であらう。これが今日の我が国の混乱の根本原因なのだ。

○

されば、神道的霊魂観はいかなるものと考へるのか。私もまだ思案中であり、また詳細を述べるゆとりもないが、基本は、個人のいのちは個人のものであって個人だけのものではない。家族、民族が、さらには人類が、いのちを共有し共存してをるといふ存在であることを理解することではないかと考へてゐる。悪い意味での全体主義に陥らづに、この神学を整理して行くことが急務だと思はれる。そうしないと金融や政治以前に、日本精神が破綻してしまふ。反対に、このことが明瞭になれば、世界に貢献できる思想ともなりうるのではなかろうか。神社本庁の強化会議が家族や家庭をテーマにするときにも、このことを考へ併せて討議していただければ幸ひに思ふ。

（神社新報）

一誌一話（70）

古代の海上航路（5）

樂　杏子

神の島沖ノ島が有する力をここでもう一度考えてみよう。

島は海北道の荒海玄界灘の真只中に屹立する道標、いわゆる今の灯台としての役割を持ち、古代人から絶対視されてきた島である。なぜなら、大波に洗われて島は姿を消してしまう程の、大嵐が過ぎて平らな海に戻ると、やはり同じところに顔を出し、目の前に姿を表して来る。その為古代人は遠くに見る此の島は絶対に不動な物であり、どこからでも定位置に見える絶対神として敬ってきた。

海北道は北部九州から朝鮮半島までの海の道が、関門＝沖ノ島＝対馬＝釜山と、三分の一づつの距離を計る点で繋る一直線で結ばれて入る。

一点の曇りもない真青に晴れ上がった快晴の日に、宗像の神が住まえる大島・宗像を眼前にして、沖ノ島の島上に立って海上を望見すると、半径約八十キロラインの真東には、弥生時代の「土井ケ浜遺跡」がある豊浦浜や関門海峡、また北九州の島々と山々とを見ることができる。勿論、目の前には大島・地ノ島を始めとする宗像の海岸と山々が手近に見える。

今度は目を左に移して見よう、相の島があり粕屋の山々と志賀島・小呂島それに糸島半島、そして壱岐へと続く。それを過ぎると真西には対馬の島が線上に横一直線に現れる。丁度大型の半円形の湾の姿をしているように見え、海岸線に浮かぶ島影や山影が箱庭の絵のようである。

朝鮮半島までは百四十五キロもあり、勿論遠目にも入ってはこないが、対馬の韓岬から一直線上に進むと釜山市である。

日本の古代統一国家の倭国からの貿易船や大使船等の官船は、手漕ぎ帆船とした大形の準構造船である。

大和平野難波の港を船出して風を背に瀬戸内海を通り、北部九州沿岸を一路磯づたいに、航行して行ったことであろう。呼子、壱岐、対馬を通過するといよいよ日本との別れを告げる。

ここからは六ノット（時速約十一キロ）の速さで流れる対馬暖流に乗り、朝鮮海峡を越え釜山へと進むが、後に残すは三分の一である。

この様にして風を背に浪に乗って、当時の最新の文化国家を誇る朝鮮半島へと渡っていった。勿論倭人だけが行っていた、文化文物交流の出船だけではない。

倭国から見ると入り船ではあるが、当時の半島人も彼等の母港を船出して倭人が通った逆コースで、神の島沖ノ島を眼に入れながら船を進めて行ったようである。

何故なら、今日も釜山から博多へ航行する船、また関門海峡を通行する船々が、有視界の操行で常に沖ノ島を見ながら操舵していると聞くからである。

昔も今も、日本の玄関口玄界灘を往来する出船入船が、沖ノ島を目標としての航海であることには変わりがない。

やはり沖ノ島は海北道の航路の道標であり、海の人々の不動の神の島である。常に強大な存在である。

平成十年度　宗像大社氏子会評議員会並びに総代総会開催

新会長に倉元清彦氏

五月二十九日、午前十時より、清明殿に於て、宗像大社氏子会総代総会が開催された。

総会に先立ち、宗像市郡内から選出された評議員並びに総代百余名は本殿前に参集、正式参拝を行い出光太蔵氏子会会長に合わせて玉串拝礼を行った。

大森芳喜副会長の開会の辞に続いて、国歌斉唱、神宮並皇居遙拝、敬神生活の綱領が唱和され、出光会長、太田宮司、来賓として、渡辺具能衆議院議員、吉村剛太郎参議院議員両秘書の挨拶の後、議事の審議に入り先づ事務局より、平成九年度氏子会決算並びに事業報告が、又古屋敷監事より監査報告が行われ、全員一致で承認された。

次に平成十年度氏子会予算案並びに事業計画案の中で、本年度より新設された積立費（幡・幕・提灯等の修理・調製等に当てる）の説明が行なわれ、協議の結果可決承認された。

次に役員の改選が行なわれ、去る五月十一日評議員会に於て、副会長に佐藤千里氏（大島）、大森芳喜氏（津屋崎町）、安部照生氏（宗像市）が、監事に、黒石満氏（玄海町）、楠田繁男氏（福間町）、島田光男氏（勝浦）、古屋敷清文氏（宗像市）が選出され、会長には四副会長の中から倉元清彦氏が推薦されたことを報告、一同承認を得て、新役員が決定した。

次に氏子会費の取りまとめの説明を事務局が行い、各総代へ依頼、協力をお願いした。

次に平成十年度氏子会総代並評議員委嘱状の伝達と研修旅行参加状況の説明が行なわれた。

本日の議事はすべて可決承認され、続いて新会長倉元清彦氏、旧会長出光太蔵氏が挨拶された。津屋崎町中野新評議員の音頭で万歳三唱に続き、佐藤千里副会長の閉会の辞を以って、氏子会総会は無事終了した。

主基地方風俗舞保存会

研修旅行

去る四月十九日（日）から二十日（月）の一泊二日で、主基地方風俗舞保存会研修旅行が行われた。

田中保政会長外九名出席のもと午前十時、宗像大社を車二台に分乗して出発。先づ、第一日目の目的地である大分県東国東郡にある姫島へと向った。

この姫島は周囲約十七キロ、人口約三千人の島で、念仏踊りから発展したと言われる盆踊りの「キツネ踊り」で有名な島である。国東半島の先端にあたる国見町の伊美港より六キロ先の姫島までフェリーで約二十分かけて渡島し、島内観光を行った。

姫島は、古事記によると伊邪那岐命、伊邪那美命の二柱の神が「国生み」にさいし、大島を生み、次に女島を生むとあり、この女島が姫島で、またの名を「天一根」という。

また島七不思議と言われるものがあり千人堂、浮洲、逆柳、かねつけ石、拍子水、浮田、阿弥陀牡蠣がそれである。時間の都合上、千人堂しか見学出来なかったがここは観音崎にある小さなお堂で、大晦日の夜、債鬼に追われた善人を千人収容したというのでこの名がついた。断崖の先端に建つお堂は室内が六畳位の小さな建物で眼下には紺碧の海が広がる、とても美しい名所である。

姫島をあとにして一行は国東半島を一周し、宿泊地である別府に向い、別府温泉に投宿した。

翌朝には熊本へ向い先づ、肥後一の宮、「阿蘇神社」に参拝した。阿蘇神社は肥後の国の総鎮守神として崇められ、楼門の規模は宏壮で神社建築には珍らしく二層の屋根になっている。参拝後神社より赤米で醸造された、赤色の珍らしい神酒を頂いた。

次に阿蘇ファームランドへと向った。今話題の観光地とあって、平日にも関わらず多くの観光客があり、熊本の名産品等が数多く並べられており、「地元玄海町の観光作りの参考にならないか」と一行は色々な角度から見学した。とにかく規模の大きさには圧倒させられた。

かくして今年の研修旅行も会員の親睦を深めつつ、無事終了した。

宗像大宮司家子孫宗像清彦氏参拝される

若葉薫る五月二十日、長野市より宗像清彦氏が参拝された。

清彦氏は当年は七十才の御高齢なれど身体健康そのもので、立ち振る舞いも立派であった。

アメリカ、イリノイ大学で東洋美術の教鞭を取っておられたが、退職後帰国され、長野県の清泉短大教授となり再度教壇に立たれ、国際科学課で活躍されていた。

近年この清泉短大も退職されたのを機に、御先祖様のご奉仕された宗像大社の参拝を計画されたのである。

清彦氏は、当大社最後の大宮司氏貞公（第八十代）より数えて十五代になられるそうである。清彦氏の祖を伺うと、宗像家お家騒動のあった氏男（第七十八代大宮司）の時代、ただ一人の生存者「国丸君」が山口県萩に逃れた。この国丸君を祖として続いたのが宗像清彦氏の家系と伺った。

清彦氏の祖父「半之助」氏は明治期大阪で「宗像商会」を設立され、石炭王として財を作られた人物であった事から、清彦氏は永くアメリカに住まれ、イリノイ大学教授として活躍され、現在も同大学の名誉教授である。

宗像大社で正式参拝された後、当大社の聖地である高宮に参拝され、さらに第二宮・第三宮にお参りされた。

参拝を終えられた清彦氏は永年の念願をはたされてお顔も晴れやかに輝いていた。

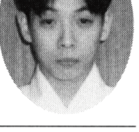
この後さらに玄海町上八古門にある「氏貞公」墓前参りをされて長野市にお帰りになると伺った。

今後益々のご活躍とご健康をお祈り申し上げます。

——◇——◇——

新入神職紹介

当大社に春風にのって二人の神職が奉職しましたので紹介致します。今後ともよろしく御指導御鞭撻の程お願い申し上げます。



◎中原裕生（ひろたか）出仕

山口県美祢市生まれ、二十四才です。

国学院大学（別科）卒業後、神田明神、戸越八幡神社、東八幡宮で奉職後、今年五月より宗像大社に奉仕しております。

実家が社家の為、大卒後神職学習に入り各社で基礎勉強をなし、当大社で総合的に神道を修める覚悟で何事にもトライし吸収して頑張ります。

◎御床（みとこ）直之（なおゆき）出仕

福岡県糸島郡志摩町生まれ二十才です。

国学院大学（別科）にて神主を志し勉学に勤むと共に東京浅草神社で実習生として奉仕しておりましたが、都会のネオンより漁り火が恋しく帰郷致しました。

今年四月、宗像大社に奉職致しました。当社の由緒を学び、神職人生の基礎を築き度く頑張ります。

平成十年度

夏越祭・大祓神事御案内

暑さも日毎に厳しさを増してまいりました。

さて、恒例の夏越祭が近まってまいりました。このお祭りは、大祓神事を中心に行われ心身の罪・穢を人形に託して祓い除き、清々しい気持ちをもって明日の生活を安らかにするための祈りをこめたお祭りでもあります。

本年も左記により斎行致しますので、皆様お誘い合せの上御参拝下さいますよう御案内申し上げます。

六月吉日

宗像大社

崇敬者各位

記

一、七月三十一日　午後五時、大祓神事、引続き夏越祭

宗像大社形代（かたしろ）について

国宝　滑石人形（ひとがた）

当大社では、古く一千数百年前から、交通安全や身体安全を祈って多くの人形（ひとがた）・馬形（うまがた）・舟形（ふながた）などがお供えされております。このことは、宗像大社が道主貴（みちぬしのむち）（あらゆる道の神様）として多くの人々から厚く信仰されていた永い歴史を物語るものであります。

社務日誌抄

五月一日（金）
月次祭斎行、総社祭午前十一時、辞令・本日付を以って出仕を命ず。
中原　裕生（ヒロタカ）

五月二日（土）
実習・京都女子大学学生四十五名学芸員実習を行う。

五月四日（月）
来社・高良大社宮司竹間宗磨氏

五月五日（火）
五月祭・浜宮祭斎行
浜宮祭午前十時三十分
五月祭午前十一時
太田宮司以下神職四名奉仕、参列地元区長他十二名。

五月七日（木）
第五十回九州各県神社庁連合会神職総会開催、当番福岡県、会場シーホークホテル、宮司以下八名出向。

五月十一日（月）
参拝・神社本庁工藤副総長外一名正式参拝。

五月十一日（月）
宗像大社氏子会評議員会総会開催、午前十一時より於清明殿。

五月十二日（火）
社頭見学。宗像市河東小学校六年生社会科見学、神宝館拝観。
太田宮司、第七管区海上保安本部設立五十周年記念式典に出席。

五月十四日（木）
筑前神職総会、北九州市飛幡八幡宮正式参拝、太田宮司以下五名出席。

五月十五日（金）
月次祭斎行。総社祭午前十一時、神島権宮司以下神職十名奉仕。
参列地元総代、上田グループ（村岡加代香氏外一名）

五月十六日（土）
第二十一回宗像王位戦奉告祭、㈳法人日本将棋連盟、滝征一郎七段以下関係者参列。

五月十七日（日）
第二十一回王位戦開催於清明殿。
第二十一代宗像王位に北九州市藤本荘太郎氏が就く。

五月十九日（火）
九州管区警察局福岡県通信部通信運用課長田川浩康氏他二名来社。

五月二十日（水）
イリノイ大学名誉教授宗像清彦氏正式参拝。

五月二十一日（木）
参拝・宗像自由大学藤城義博氏以下十名渡航海安全祈願斎行。
出張・太田宮司・神島権宮司青葉会総会出席の為上京。

五月二十三日（金）
㈱富士ピーエス橋梁工事安全祈願祭午前十時斎行。
勝屋酒造報賽祈願祭午前十一時三十分斎行。

五月二十六日（火）
沖津宮現地大祭宵夜祭中津宮に於て斎行。

五月二十七日（水）
太田宮司以下六名渡島沖津宮現地大祭斎行。
宮司以下六名神職大島中津宮より渡島、参拝船七隻、参拝者百七十名、FBSテレビ同行取材す。

五月二十八日（木）
愛知県立陶磁資料館井上氏来社

五月二十九日（金）
宗像大社氏子会総代総会開催於清明殿。全菊連支部長会於「魚屋」

五月三十日（土）
午後二時「魚屋」にて全菊連支部長会開催太田宮司ほか二名出席

五月三十一日（日）
参拝・小郡市日吉神社多田宮司他六十名参拝

宗像大社歌会
俳句作品集（四二）

若松　髙橋　忠實
喜寿の海犬かきながら泳がねば

福間　森　清
土手の草まだらに刈られ五月来し

自由ヶ丘　細川　絹子
芍薬の花の目ざめの髪を梳く

小笹　山下しづえ
朝明けしすずめにやりぬ古古米を

日の里　花田いつ枝
絶間なき地震情報夏に入る

東郷　吉武　湧泉
新緑や太古濁らぬ五十鈴川

東郷　中野　きみ
住み古ればこよなき里よ囀れる

東郷　吉田　衿子
人住まぬ卯波のの島に鳥井立つ

東郷　吉田　杏子
逝く春や命の重さ病みて知る

東郷　三浦美千代
山清水十字に白き山葵花

東郷　有吉亜紀子
紋甲烏賊魚屋にでんと転がされ

東郷　田中　雨葉
牡丹咲き牡丹崩れて牡丹寺

東郷　木原　房子
役場とは村の顔かも花水木

（続）浜の寄物
127
いしいただし

南有馬では原城趾へ行ってみた。私がこの原城址を初めて訪ねたのは、昭和三八年（一九六三）だから、もう三五年前のことになる。島原の乱に興味をもち、乱最期の拠点原城趾を訪ねてみたかったからである。

鉄道とバス・船を乗り継ぎながら島原半島・天草を歩いた。のんびりと時間をかけた一人旅だった。

原　城　址

大牟田から船で渡り島原鉄道に乗り、南有馬駅という小さな駅で降りた。原城は城の面影はなく、丘陵いっぱい畑地となっていた。ただ悲惨な歴史も埋もれていたといった方がよかった。板倉重昌が狙撃されて命を落としたところと、ホネカミ地蔵と、本丸付近に案内の木碑がたっていた。石垣らしいものも一部あったが、それが原城のものか、畑のために築かれたものか、よく分からなかった。大部分は島原城を築く時に持ち込まれている。畑地を歩きながら、小さく砕けた陶磁片や、カキ殻が目についた。海も陸も二重三重に囲まれ、食糧を絶たれて、下の海岸で貝や海藻をとって食べたのである。一揆農民の呻吟が聞こえてくるようであった。帰りは南有馬小学校を訪ね、城内から掘り出された鉄砲の弾丸や刀らしい錆た鉄片等を見せてもらった。

島原の乱は寛永十四年（一六三七）十月おこる。松倉勝家領の肥前島原と、同国唐津寺沢堅高領の肥後国天草の農民は、苛酷な支配に耐えかねて一揆を起こした。農民・小西の宇人、切支丹宗がからみ、その首領は十六才の益田時貞（天草四郎時貞）だった。四郎は神童といわれ、美形、才気煥発、医術、キリスト教義にくわしい人物（国史大辞典）という。一揆勢は島原城、天草富岡城に迫ったが失敗、当時廃城となっていた有馬氏の居城原城址に二万数千が立て籠もった。幕府は松平伊豆守信綱を総師として十二万が城を囲んだ。翌二月末に鎮圧、絵師山田右衛門作を除いて天草四郎以下全員が殺害され、その首は街道にさらされた。乱後、更に切支丹弾圧が強化され、数年後鎖国体制が確立する。

いま、原城と周辺は整備が進み、本丸に行く道路は舗装され、本丸近くには駐車場もある。本丸跡の発掘も数年続けられている。本丸には桃太郎風の天草四郎像があったのがおかしかった。これは小林西望作である。ホネカミ地蔵のところは説明板がたっていた。ホネカミ地蔵とは、明和三年（一七六六）、乱後一二九年後、この地の願心寺、法誉上人が散乱していた人骨を拾い供養し、地蔵塔を建てたのである。「骨かみ地蔵に花あげろ、三万人も死んだげな、小さな子供も居ただろに」と読んだ八並則吉は宗像郡福間町上西郷出身、国定教科書「国語読本」や小学校唱歌教科書編纂委員をし、旧制五高教授もつとめた。

なおホネカミとは、骨をかみしめるの意味で、その事から「自分自身のものにする」更に「人々を済度する」「助ける、救う」の意で宗像市教育委員会編の「宗像の歴史と文化財」には平山和彦氏（現筑波大教授）が「骨カミという言葉」について書いている。

乱中、非戦闘員をかくまっていた空濠には、いま十字架をかたどって花が植えられていた。

痛ましき原の古城に来て
見ればひともと咲けり白百
合の花　　新村出

今年は乱後三百六十年である。それを記念した幟が本丸近くにたてられ、それが海風ばたばたと音をたてて翻っていた。

原城文化センターに発掘されたものがあると聞いて行ってみたが、休日で学芸員はいなかったが、館の人の好意で、発掘品の一部を見せてもらった。本丸跡からは人骨も出ていた。また鉛の弾丸や、にぎりこぶし大の鉛弾もあった。幕府側の大筒から発射されたものか、原城攻撃は平戸のオランダ商館にも命じて行わせ、オランダ船からも砲撃しているので、オランダ船のかも知れない。他に僅かだが陶磁器片もあったが、中国の景徳鎮窯や福建広東窯があり、築城時のものの可能性がある。本丸からは、クルス、メダイ、ロザリオ等も出土しているが、センターには展示されていなかった。

幸なるかくるすがしたの
赤のまま　　山本健吉

瀛津島防人日記（上巻ノ十一）
青柳種信著
平野国臣写

三所の　神の御形と
をさめ給ひ　いつきまつ
れり　うべなうべな
身のかたの宮と
　御名に負（オホ）せり

反歌

〃みたからを
　沖つ御しまの
此みやにしずまり
　います皇大御

神御嶋のめぐりなる岩に、金おほくあり。そは浪に打ち出されて桃の大さなるもあり。又は岩の缺（コケ）たる内に、切金（キリガネ）などいふ物の如くなるがいくらも出るあり。又、水晶など見る如く、方（ケタ）に刻立たるやうなる黒きかねの出たるもあり。打わたりてみれば、中は銀（シロガネ）の如し。中にも、水の嶋といふ所のあたりの岩岸、すべて金（コガネ）のみ也。雨降て晴なんとするころ、

日のさし出たる時などぞ、ここら光あひてきらきらし。その岩岸に水のしたたる所あり。土さけててる（照）夏の日にもかかるることなし。もろもろの病をいやす。

陶物（スエモノ）あるは竹筒やうの物に汲て持返る。国人いたく重みしあへり。

此の水の流れ出る下の磯の岩角に、金のいろしたる小き海鼠（ナマコ）をれり。俗に金海鼠（キンコ）といふ。

〃おひ人のわかゆとふ水
ぞ沖つしまありそ（荒磯）
の岩井いざむすびてな目
かがやくこがね花さく岩
のまゆいづる走井のむは
しよしもはしりゐる水底
さへにてるまでに五百個（イホコ）
　岩むらにくがねかがよふ〃

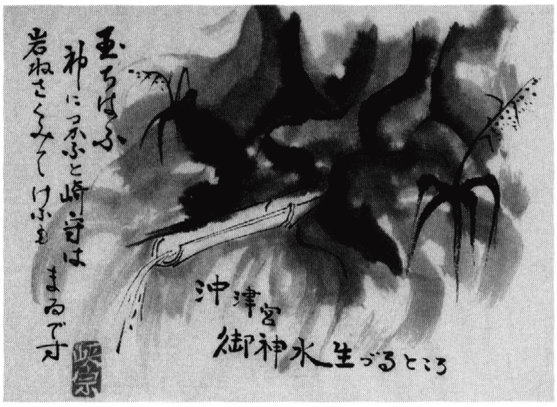
級戸辺（シナトベ）のいぶきしづけかれば、韓人（カラヒト）のよりくとふ事もなく、手むだきをれば、防人等は、ひたすら神につかふる人の如く、朝夕に御前に落ちりたる木の葉をはらひ、（石をしきなどしてつかへまつる。神山の内に入には、）つねに声とどろかしてゆく。もし、ひそかにゆけば、神の遊び玉ふにゆきあふといひ伝へたり。

〃玉ちはふ
　神につかふと崎守は
岩ねさくみて
　けふもまゐです〃

五月朔日（サツキツイタチ）。けふなん、高の社にまゐりて、杜鵑（ホトトギス）を聞つ、と人のいひければ、

〃高々にまつ
　吾をおきて深山（ミヤマ）べに
鳴くべきものかしこ
　ほとときす〃

嶋の西の方、対馬にむかひて、大なるいはやあり。高さ十丈ばかりなり。深さも同じほどなるべし。


玉ちはふ
神につかふと崎守は
岩ねさくみて
けふもまゐです
沖津宮
御神水生づるところ

故郷の神宝
(40)

〈依代（よりしろ）〉

日本の神々とそれに対する神祭り、いわゆる神道祭祀は、天然自然というか、自然発生をその根源としてきている。

古代の祭りである原始神道期は、今日のように祭りの度に同一社殿で繰り返し行なうことはなく、その対称の自然物を目の前にして、祭場をつくり祭壇を作り設けて、祭りを斎り行ってきている。

このことは日本各地から発見されてきた、古代祭祀遺跡がよく知らせている。

「日光男体山」「武蔵伊興」「建鉾山」「神坂峠」をはじめとして、「沖ノ島」等これらの祭祀調査報告書に詳しく報告されている。特にそれらの調査は、神祭りの起源とその祭祀遺跡調査の基礎を作り出したことでも有名である。

今も奈良県大神神社では神体山である三輪山を神体（本殿）として祀り、社は神に対する礼拝の場所である拝殿だけとしている。

これは原始の姿そのままが現代に生きているといえよう。

各神社が行なっている社殿外の祭儀においては、その都度神々が降臨する斎つきの場に、神が降り立つ物としての依代を設置し、ここに天降りを願い祭りを斎行している。

これらは神道でいう古代の神籬・磐境の祭祀の再現である。

現に宗像大社ではこの古代の祭儀が今も続けられている。宗像大社辺津宮境内地内の高地にある高宮祭場がそれである。辺津宮の神社祭は、辺津宮祭典に先立ち、神木楢の木を依代とした祭壇の高宮祭場で高宮祭を斎行し、つづいて本殿祭に移り、ここで再度祭りを執り行うのである。

先年来より数度の学術調査により発見された沖ノ島古代祭祀遺跡は、神道でいう神籬磐境の祭祀が繰り返された所である。その沖ノ島での祭祀はいわゆる「一祭祀一祭場」であり、奉献された品々は「一祭祀一祭具」である。つまり、この祭り方式の繰り返しであった。

この一祭祀一祭場と一祭祀一祭具による神籬磐境の形をとる神祭りは、四世紀から初まり十世紀初頭までと六〇〇年続づいていた。その頃は丁度日本が大和朝廷による統一国家形態の基礎となる時期から、律令大和王朝の対外交渉が終った頃である。

この様に永く続づけられた沖ノ島古代祭祀は、対外交流という大きな目的があり、そのため北部九州の海上権を制していた宗像海人族と、大和朝廷との共同で行った神まつりであった。

祭祀の形式も

一、岩上における祭祀。
一、岩陰における祭祀。
一、半岩陰半露天における祭祀。
一、露天における祭祀。

と四段階に形態分類されてきているが、祭りにおいて神が降臨する依代は、沖ノ島では常に島を造った岩である。

〈松〉